

# 美意識から始まる不可分の道行き

## 科学と芸術

自然と人間の調和

酒井邦嘉 監修

日本科学協会 編

み続けている。

本書は、科学と芸術のク

ロスオーバーに注目し、3

部(第一部・創造と想像、

第二部・人と生物、第三部

・都市と自然)構成で14の

視座から人間の新たな可能

性を探っている。テーマが

大きいだけに、とっつきに

くいところがあるが、そこ

は第一部で千住博氏(京都

芸術大学教授)と酒井邦嘉

氏(東京大学大学院総

合文化研究科教授)による

対談「芸術と科学の邂逅」

が導入部的な役割を果た

し、以降の例えば、◇ペー

トウヴェンはなぜすごいの

か◇マンダラ・視覚化され

た最高真理◇生命を主体と

する哲学◇四次元の芸術◇

庭園芸術が問う技術時代の

総合芸術◇人間と自然の関

係の文化「庭」の今一など

の視座の理解の助けとなっ  
ている。

芸術にとって作品を具現

化するために必須なのが独

創性で、それを生み出す原

動力となる日常的な観察の

意識によって対象を正確に

把握することができる。こ

れは科学にも通じることで

あり、現象を繰り返し観察

し、仮説が正しいかを確か

めることに尽きる。まさに  
科学と芸術は「同行二人」  
である。

ある世界的に著名な老科

学者が若手の研究者たちを

前に「一流になりたけれ

ば、自分のスキルを磨くと

ともに、一流の文化や芸術

に触れなさい。それが将来

の糧となる」と強調し

た。このことは科学を志す

人たちだけに向けられてい

るわけではない。本書を手

にした人ならば、科学館や

美術館を訪れた際に、これ

までとは違った視点で、新

たな印象を受けるかもしれ

ない。大いに刺激を受ける

本である。

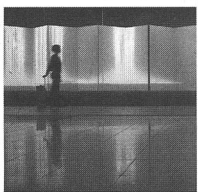
(A5判336頁、215

300円入税込み)中央論

新社刊)

## 書籍紹介

# 科学と芸術



酒井邦嘉 監修  
日本科学協会 編

自然と人間の調和

中央論新社

から常にフロンティアに挑  
新しい価値観を取り入れな

芸術は古くから、基礎お  
よび応用科学と深く結びつ

いてきた。ヒタゴラス、ダ

・ヴィンチ、ケプラーらの

科学者による新発見は、絵

画や音楽における美意識と

混然一体となっていたとい

う。現代の科学者も、整合

性や対称性といった普遍的

な美の概念を意識しなが

ら、研究に感性の豊かさや